

国語問題

〔問題一〕 次の各文の――を付けた漢字の読みをひらがなで書きなさい。

- (一) 手土産を携_もえて訪問する。
- (二) うまく敵の目を欺_かく。
- (三) 音楽を聴くと気が紛_まれる。
- (四) 彼は慈_{あや}悲_{かな}深い性格だ。
- (五) 資金の調達に奔_{はし}走_{そう}する。

〔問題二〕 次の各文の――を付けたカタカナの部分にあたる漢字を書きなさい。

- (一) 両親と腹をワ_はつて話す。
- (二) 木のミ_きに苔_{こけ}が生えている。
- (三) メンミツな計画を立てる。
- (四) 今のままではサイサン_{サイサン}が合わない。
- (五) 時代のチヨウリュウ_{チヨウリュウ}に乗る。

〔問題三〕 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

ヨーロッパでの最初の哲学者は、タレスというひとだということになっている。彼は、「万物の原理は水である」と説いたことで知られている。紀元前六百年頃のことだ。こう言ったことが、彼に「最初の哲学者」という栄誉が与えられた理由だと、たいていの本に書かれている。

「世界は何から出来ているか」、この問いに答えることが、哲学の最初の思考だったわけだ。

たしかに、タレスの後の哲学者たち、たとえば*ミレトスのアナクシマンドロスは、「無限なるもの」_{ト・アペイロン}が万物の原理（アルケー）であると言_いい、アナクシメネスは空気（氣息）が万物の原理だと説いている。

要するに世界の原理_{しんり}が何であるかを「説明_{せつめい}」すること、これが哲学というものの原理だったのである。たとえば、^①世界は神が七日間で作ったという「説明_{せつめい}」は哲学にはならないのだ。

「世界は水から出来ている」と「世界は神が作ったものだ」は、世界の説明としてはどちらもほとんどんのように見える。この二つを較_{くら}べて見ると、前者が世界の*質料の原因について言っているのに対して後者は世界の存在理由について言っている。だが、もっと重要な違いは、前者では推論がもうこれ以上遡_{さかのぼ}れないところまでいきついているという点だ。

「世界は神が作った」という説明は、「では神は誰が作った？」という問いを、人間の疑問の能力の当然_{たうぜん}の権利_{けんり}として呼びよせる。だが、「一切は水から出来ている」という説明は、すくなくとも、水を作り上げているもつと細かな何かがあると一般に信じられていない限りは「じゃあ水は何から出来ているか」とは聞けないのである。

ギリシャ哲学で言う世界の原理とはそういうことだ。それはだから、一番始め、起源を意味する。哲学とは要するに、「これは何であるか」を説明するのに、その、因果を遡_{さかのぼ}つてもうそれ以上遡_{さかのぼ}れないところまで問いつめるような思考法として現れたと言える。

ところがしかし、誰でも知っているように、哲学はつぎつぎと現れる異説の歴史でもある。（中略）

ギリシャの哲学者たちをすこし追ってみることにしよう。
タレスのつぎに登場するのは、アナクシマンドロスである。彼はタレスが「水」と言ったものを、いや「無限なるもの」と呼ぶほうがいい、と言ったわけだ。

これは、万物の原理が「水」ではなくなぜ「火」や「土」であってはいけないのか、という新しい質の疑問から出てきたものだと思われると思う。

万物の原理が「水」だと言うにはタレスにそれなりの理由があった。しかし「水」だと言っていないなら、「火」や「土」であってはないという決定的な理由は見出_{みいだ}せない。それを主張し合ったら水掛け論になってしまう。それならばいっそ、「水」や「火」や「土」の基となっているものを想定して、それを「無限なるもの」と呼べばすっきりする。アナクシマンドロスはおよそそのように考えたのだろう。

アナクシマンドロスのつぎはアナクシメネスである。彼は空気（氣息）こそが原理だと言った。彼の説は一見、目に見えるもの的大もとに「目に見えないもの」を想定したアナクシマンドロスより後退しているように思えるかも知れない。

だが、アナクシメネスの説は、「無限なるもの」という原理に対する一つの疑問から生じたものだと思う。

ひとつは「無限なるもの」なんて言うのと、それがいったいどういうものか、本当にあるのかなのか、誰にも確かめられないじゃないか、という疑問だ。もうひとつは、単に「水」とか「無限なるもの」とか言ってるだけでは、世界の変化の説明はうまくつかないという疑問である。空気が濃くなったり薄くなったりする（当時では）唯一のモノのように見えたから、この変化性が、世界のさまざまな変化の根本だと考えられたのである。

アナクシメネスの「空気（氣息）」という原理は、こういう新しい疑問に応えるものとして出てきたわけだ。

と、まあそんな具合にギリシャ哲学は進んでいくことになって、これを詳しく追っていくときがないのだが、ここまでのところでもなぜ哲学がつぎつぎと異説を生むかということの原理はわかるような気がする。

哲学とは、まず言葉によって世界を説明する行為である。だがそれだけではない。世界を説明するだけなら、たとえば神話や物語などの方法でもできる。哲学の世界の説明は、ある要求を含んでいる。それは先に述べたように、推論を限界まで押しすすめようとする性質を持っているのだ。言い方を換えると、世界の全体と起源を問題にするのである。

このことにはちよつとした理由がある。哲学が基本的にそのように思考するのは、いわば人間の理性の本性からくるのである。

これは*カントが言っていることだが、彼によると理性の本性は推論の能力であり、この理性の推論の能力とは、もうそれ以上進めないとところまではいくらでも新しい推論を生み出すような力なのである。

神話や物語を支えているのはAであってBではない。Cは、たとえば神が世界を七日間で創った、という像に満足するが、Dは、では神はいつどのようにに現れたのかと推論する。この果てしない疑問（推論）の能力がEの本性であって、Fはしたがって必ずその限界までいきつかないと満足しないのだ。

哲学においては、理性のこのような本性が、世界の全体（＝総体）と起源を問わずにはおられないようにさせているのである。

だがまた、このことが哲学においてつぎつぎに異説が生み出される根本原因でもある。というのは、もともと言葉というものは世界の全体や起源を言い尽くせないようにできているからだ。このことにも理由がある。

ほんらい世界というものは、わたしたちにとって汲み尽くせない「無限」な相として存在している。これは世界がもともと「無限」だというのではなく、人間が自由な存在であることと裏返しのことである。ところが、理性的な言葉は、世界をある同一な全体として*措定しようとする。だから言葉が世界をひとつの全体として言い当てようとした途端、わたしたちは一方で必ず、^②言葉によって規定された世界をはみ出すような世界の総体を思い描くのである。

つまり、人間の自由の感覚の中では、言葉によって捉えられた世界の全体像は、つねに言語化されない世界の総体的な直観像より小さいと感じられるのだ。このズレがいつも、より新しい言語化への衝動を生み落とすのである。ではなぜ、言語化された世界は、いつもわたしたちの言語化されない世界の直観より小さいと感じられるのか。

※、タレスが世界の原理は水であると言ったとき、この「水」という言葉にはタレスのうちの世界の直観がこめられていたはずだ。いわば、タレスは自分のうちの世界に対する直観の総体を「水」という言葉で表現したのだ。しかし、表現された「水」という言葉は、タレスの直観から離れて、単に万人の中で使われている「水」という言葉の一般の意味としてしか生きない。また哲学は、そういう言葉（論理）の一般性の中でしか力を発揮しない。この一般性のレベルでは、先に見たように「万物の原理は水である」という言い方は「万物の原理は火である」という言い方と対等の権利になってしまうのだ。

つまりこういうことだ。哲学者は、自分の世界についての総体的直観を表現しようとして言葉を用いるが、表現された言葉は、言葉の一般的な論理規則の中に投げ込まれ、そこでいわば言葉のゲームの中に入り込む。これは言葉の宿命なのだ。

哲学者のひとつひとつの説は、みな彼らの世界の総体的直観^③についての表現だが、それは論理としては単に世界の全体と起源についてのある規定（＝限定）の仕方にすぎない。そのようなわけで、^③哲学者たちは誰も、世界の総体を言い尽くそうとして、逆に、世界をある言い方の中で限定することしかできないのである。

要するに、科学や物語がある明確な（つまり限定された）目的を持ち、それになうように世界を描こうとするのに対して、哲学ははじめから限定されない視線で世界の全体を捉えようとする。だが言葉という手段ではそのことはそもそも不可能事なのである。だがまたそれにもかかわらず、哲学は、人間の理性がそのような（世界の全体を捉えたいという）欲求を本来的に持っていることのひとつの現れでもあるのだ。

だからわたしたちは、哲学が世界についての統一見解を見出さないことでこれを無意味なものと考えする必要はない。哲学はこのように、すでに出来上がった哲学の言葉をひとつの踏み台にしてまた新しい論理の言葉を積み重ねる、という仕方でしか生き続けられないが、まさしくその中で、人間の徹底的で優れた思考というものの原型をわたしたちに直観させるのだ。だからわたしたちは、それぞれの学説がある真理を知るためにない覚えようとするのでなく、そういった哲学的直観を深く育て上げるために哲学を読めばいいのである。

（竹田青嗣『自分を知るための哲学入門』より）

（本文に一部表記の変更があります。）

（注）ミレトス＝古代ギリシャにあった都市。

質料＝ものが形作られる際の素材となるもの。たとえば「木造の家」の場合、その素材である材木が質料にあたる。

カント＝イマヌエル・カント。ドイツの哲学者。（一七二四～一八〇四）

措定＝ここでは、ある考えを主張すること。

(二) ―線部①「世界は神が七日間で作ったという『説明』は哲学にはならない」とありますが、「世界は神が七日間で作った」という説明が哲学にはならない理由として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア「世界は神が作った」という説明は「世界はなぜ存在するのか」という問いへの答えであり、「世界は何から作られるか」という問いに答えることを目的とする哲学とは根本的に相容れ(あひい)ないから。

イものごとの起源をつきつめて考えることで世界の原理を探ろうとするのが哲学の性質であるのに、「世界は神が作った」という説明は、世界が存在する原因を「神」という証明不可能なものに定めることで思考を単純化させているから。

ウそれ以上さかのぼることのできないものごとの起源を世界の原理と見なすのが哲学であるが、「世界は神が作った」という説明からは「神は誰が作ったのか」という当然の問いが新たに生まれるという点で、哲学的ではないから。

エ「世界は神が作った」という説明は「神は誰が作ったのか」という新たな問いを生み出すという点で、新たな問いが生まれることのない哲学よりも質の高い原理を説明できているといえるから。

(二)

A

F

 には、ア「理性」、イ「想像力」のうちのどちらかのことが入ります。それぞれの

--

 に入る適当なことを選び、記号で答えなさい。

(三) ―線部②「言葉によって規定された世界をはみ出すような世界の総体を思い描く」とありますが、「言葉によって規定された世界をはみ出すような世界」を思い描こうとする人間の心の動きを、筆者は何と言いかえていますか。最も適当なことを、本文中から十文字で抜き出さない。

(四)

※

 に入る語として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ただし イ たとえば ウ なぜなら エ そして

(五) ―線部③「哲学者たちは誰も、世界の総体を言い尽くそうとして、逆に、世界をある言い方の中で限定することしかできない」とはどういうことですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 哲学者が世界についての総体的直観を表現しようとしても、それを言葉にすると、言葉の一般的な論理規則にはめこまれるので、その規則の中で世界について限定的に表現しているだけにすぎないということ。

イ 哲学者が自らの直観に基づいて世界の何たるかを説明するとき、一般的な論理規則から逸脱した特殊な意味合いの言葉が用いられるので、哲学者による世界の説明には限定的な価値しかないということ。

ウ 哲学者は限られた数の言葉に頼って世界の総体を説明しようとするので、人間に備わっている「世界の総体を捉えたい」という自由な欲求を満たすには至らないということ。

エ 世界を一つの全体として見なす言葉の論理規則の中で世界の総体を知るのは不可能なので、哲学者はある限られた目的を持って世界の総体を仮定するにとどめたほうがよいということ。

(六) 本文の説明の仕方として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大昔から哲学者たちに課されてきたのはいかなる問題だったのかを、読み手に語りかけながら説明している。

イ 抽象的だが人間にとって優れた思考を与えてくれる哲学の魅力を、筆者自身の体験談を交えながら説明している。

ウ 世界の原理に関してはいつの時代も解き明かせぬ問いがあるということを、複数の哲学者の考えを羅列しながら説明している。

エ 哲学とはいかなる学問であり人間は哲学とどう向き合っていけばよいのかを、哲学者の名を挙げながら順序立てて説明している。

(七) 本文中で筆者は、哲学を何のために読むのがよいと考えていますか。本文中のことがばを用いて、六十文字以内で答えなさい。(句読点も字数に含めます)

〔問題四〕 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

高校二年生の若葉(わかば)は、ウエイトリフティング(重量挙げ)部に所属しています。この日は、春に入ってきた新入部員の一年生との顔合わせがあり、若葉の同級生で部活のキャプテンでもある弥生(やよい)が、新入部員にあいさつをしています。

「女子部キャプテンの太月弥生(おおつき)です。今年の一月、関東大会に出場しました。そのことをすごい、と言ってくれる人が何人もいたんだけど、あたしは内心思っていました。そんなもんじゃない。夢はオリンピックだ、って」

ほう……と一年生から声が漏れる。若葉の顔から笑みが消えた。弥生は話すつもりだろうか。まだ、すっかりふっきた、という心境でもないだろうに。

「だけど、^①生まれつき、足の付け根に小さなトラブルがあることがわかりました」

エレナが、

「えっ」

と言ってから、グーにした手で口元を押さえた。

「いや、トラブルって言ってもね、オリンピックを目指すのは無理よ、っていうレベルなんだ。関東大会も全国大会も、この部にいる限りは目指しますよ。ただ、世界のトップにはなれない、って話」

トラブル、という言葉你敢えて使っている理由が、若葉にはわかった。故障しちゃった、と言ったら、これからウエイトリフティングを始めようとしている彼らを怯えさせてしまう。自分は例外である、と強調したいのだ。

弥生はにんまり笑った。

「他の競技で、オリンピックとか世界のトップとか言ったら、アホかって言われそうだけど、この競技はそれがアホにならない」
開いている窓から風が吹き込み、レースのカーテンが大きく翻る。

「みんなは足に問題が見つかったって聞いたら、可愛いそうに、残念だ、って思うかもしれない。でもあたしは逆。むしろ、それでよかったんじゃないかと思う。っていうのも、あたしは、自分が上へ上へ上って行ける限り、後ろを振り返らなかったと思う。新入部員が何人入っても興味なかったし、むしろ自分の練習の邪魔しないでほしい、って考えたかも。でも、こうなった以上、あたしはそこそ自分の練習もするけど、新しい目標ができた。それは、みんなに関東大会や全国大会を見せてあげたい、ってこと。つまり、上へ上へ上って行くキャプテンじゃなくて、下から下から、みんなを押し上げて行く副キャプテンに、あたしはふさわしいかな、って自分でも思うわけ」

「え？」

若葉は鷹見先生の顔を見た。はて？ という顔をして、先生も首をかしげている。

「だから、若葉。この場で急に言い出して、アレんだけど、キャプテンを引き受けてもらえないかな」

「いや、あたし……」

そういえば②この件について、ほとんど話し合ったことはなかった。当然、弥生が女子部キャプテンだ、と決めつけていたから。鷹見先生に聞かれたときに、「もちろん弥生ですよー」と即答したのだ。その場では、彼女もなにも言わなかったのだが。

この状況で一方的に宣言するとは、弥生もずるい。一年生の前で揉めることなんてできないではないか。わたしなんかがやったら……弥生に比べたら全然記録が低くて、後輩にもすぐに追い越されちゃうかもしれないよ……。

返事ができない若葉に代わってしゃべり出したのは、鷹見先生だった。

「そうか、若葉がキャプテンか。それもいいな」

「え？」

「だって、他の運動部のキャプテン、だいたいガタイがいいだろう？ 柔道部にしろ水泳部にしろバスケット部にしろ。それがウエイト部は男女とも小柄で細くって、だけど実力はあるんだぜ！ ってなれば、テレビ局の取材が来るかもしれない」

「またテレビかい！」

若葉は先生をはたく真似をした。その間に、弥生はべこっとおじきをして、さっさとみんなの後列に回ってしまった。

「じゃあ、改めて女子部キャプテンの挨拶。鏡池若葉」

先生に呼ばれて、前へ出ないわけにはいかなかった。

若葉は背筋をしゃんと伸ばした。戸塚未貴を抜かした全部員が、自分よりも背が高い。

「突然キャプテンになってしまった鏡池です」

くすくす笑いが起きるかと思っただが、静まり返っていた。みんな、次の言葉を待っている。ボケる空気じゃない。若葉は大きく息を吸った。

「さっき弥生は、みんなに関東大会、全国大会を見せてあげたいって言いました。それが、一年生を下から押し上げる副キャプテンの発言ならば、あたしは③逆のことを言いたいと思います」

若葉は大きく息を吸い込んだ。

「関東大会なんて、そうそう行けない。そんなに簡単じゃない」

え、と誰かが言った。

「ウエイトリフティング部のある高校は、神奈川ではたしかに少ない。特に女子は。だけど、県大会に出たって、参加賞で全員関東大会に行けるわけじゃない。どのスポーツもそうだけど、トップはトップ。気軽な気持ちでやれる競技じゃないってこと」

鷹見先生が、弥生が、泉平が心配そうな顔で見守っている。特に先生は口が半開きで、今にも、おいおい若葉、という言葉がこぼれ落ちてきそうだ。

「関東大会に行きたい、っていう気持ちは報われない。その可能性だって高いと思ってください。でもね」

若葉は口元に笑みを作って、みんなを見渡した。

「④絶対、後悔させない」

弥生が拍手して、それが数名に伝播して、やがて消えた。

「あ、絶対は言いすぎかな。たぶん、きっと。おそろく、もしかしたら」

「どんどん弱気になってるゾ」

と、弥生が突っ込む。

「わたしなんて、ウエイトリフティングからもっとも遠いところにいたの。はずみでやることになったの。なのに、途中で気がついた。生まれついて重量挙げには向いてない体格かもしれないけど、でも、すっごく好きだ、って。みんなもそうなってくれるように、引っぱっていく」

今度は全員が拍手した。それが止むのを待って、若葉は続けた。

「あと、これだけは確約できる。みんなの体脂肪率は思いっきり下がります。わたしだって、こんなですけど、体脂肪率十四パーセントだもん」

若葉はむきつと二の腕に力こぶを作ってみせた。

「こんな感じの挨拶でいいでしょうか、弥生。何か補足することあったら」

みんなが後方を振り返る。弥生が大きな口を半月形に開いて、笑みを浮かべた。

「笑いの絶えないアットホームな部にしようと思うんで、みなさんどうぞよろしく」

こら、それ、誰かのパクリでしょ。しかも、あんたが退部に追い込んだ上級生の。

肩を叩いて突っ込みたかったが、一年生たちが生真面目な顔でおじぎしているので、若葉はガマンして叫んだ。

「はーい、じゃあ男女別に分かれて練習開始！」

「オレたちまだ自己紹介してないんだけど」

「どうせ存在感ないからね」

*ネガティブソーセージから、すかさず突っこみが入った。

(吉野万理子『空色バウムクーヘン』より)

(本文に一部表記の変更があります。)

(注) ネガティブソーセージⅡいつも後ろ向きなことばかり言っている部員二人のあだ名「ネガティブ双生児」をもじったもの。

(一) —線部①「生まれつき、足の付け根に小さなトラブルがあることがわかりました」とありますが、弥生がここで「トラブル」ということばを使った意図を、若葉はどのように考えていますか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分が負ったけがはウエイトリフティングを続ける上では致命的なものだと言うほかないので、「故障」ではなく「トラブル」という言葉で包み隠さずに自分の深刻な現状を伝えることで、新入部員に自分の二の舞を演じさせないように忠告している。

イ ウエイトリフティングは本来故障のリスクが高い競技であり、自分が「トラブル」ともいえる軽めのけがで済んだのは例外的なことなので、気を引き締めて部活動に臨むよう新入部員に促している。

ウ 自分は「トラブル」としか言いようのない大きなけがでオリンピックへの夢が絶たれてしまったが、これはあくまでも運悪く起きたことでしかないので、新入部員には恐怖心を抱くことなく安心してウエイトリフティングに取り組んでもらおうとしている。

エ ウエイトリフティングはけがのリスクのある競技だという印象を新入部員に与えないように、自分のけがは偶然起こった「トラブル」にすぎないと思わせるような言い方をして、新入部員に部活動への抵抗感を持たせないようにしている。

(二) —線部②「この件」とはどのような件ですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ウエイトリフティング部のキャプテンにはどういうことが求められるのかという件。

イ ウエイトリフティング部のキャプテンは誰が務めることになっているのかという件。

ウ なぜ弥生ではなく若葉がウエイトリフティング部のキャプテンを務めるべきなのかという件。

エ 若葉がウエイトリフティング部のキャプテンを急遽任されることになった経緯は何かという件。

(三) —線部③「逆のこと」とありますが、若葉が話した「逆のこと」について説明した次の文の□に入る最も適当なことばを、それぞれ本文中から、①は十字、②は五字で抜き出さない。

ウエイトリフティングは、「全員が関東大会に行ける」というように□①ほど楽な競技ではないし、大会で好成績を残したいという思いが□②まま終わることもあるかもしれないということ。

(四) —線部④「絶対、後悔させない」とありますが、このように一年生を奮い立たせるような発言をしようと若葉が思ったのは、周囲のどういう様子を感じ取ったからですか。それが書かれている一続きの三文を本文中から探し、その最初の一文の初めの五字を抜き出さない。

(五) 本文の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 部活動に熱を注ぐ若葉たち部員の若さ溢れる姿を、豊富な比喻表現を取り入れながら描いている。

イ 大勢の前で話をする羽目になって緊張する若葉や弥生の様子を、現在形の文を織り交ぜながら描いている。

ウ 冗談を言い合えるほど仲が良い若葉たちの楽しげな雰囲気、会話を多用することで描いている。

エ 若葉たちと新入部員の間に見られる厳格な上下関係を、複数の人物の視点を通して描いている。

(六) 本文中で弥生は、ウエイトリフティング部において自分はどういう存在でありたいと考えていますか。本文中のことばを用いて、六十文字以内で答えなさい。(句読点も字数に含めます)

〔問題五〕 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

狭い意味での①敬語表現だけではなく、相手に対するさまざまな配慮が丁寧な雰囲気を与えます。「本来ならば直接お目にかかつて挨拶申し上げるべきところですが、手紙で失礼いたします」というふうに、自分の言語行動について弁明するのもその一つです。「急ぎますので、電話で失礼申し上げます」というのも同様です。会社で、用件に入る前に、「あいにく社長は出張中ですので、部長の私から一言申し述べます」といった前置きを添えるのも類例です。「立ち入ったことを伺うようで申し訳ありませんが」と話題に言及したり、「突然で済まないけど」とか「こんな所でなんだけど」とかとタイミングや場所に言及したり、「口を差し挟むようで恐縮ですが」とか「おことばを返すようですが」とかと、話をするという自分の行為を評価することばを前置きにしたりするのも、失礼さをいくらか緩和しようとする配慮です。

どんな表現をするかという以前に、どんな話し方をするかも印象を左右します。お礼を言うのにちやかした調子では逆効果になります。お詫び^アのことばも軽快なリズムに乗せたのでは気持ちが感じられないし、お悔やみのことばを滔々^{とうとう}と弁じたのでは心がこもらないので、どちらも少々言いよどむほうが効果的かもしれません。あまり大きな声を出すのは無作法なこととされてきましたし、②早口でまくしたてれば、どんなに敬語を多用しても丁寧には響きません。手紙でどれほど尊敬語を並べても、なぐり書きでは失礼になるイ^イのも同じです。相手の話が終わらないうちにことばを挟むのは礼儀に反するし、さりとて間があきすぎてもかえってよいけいな気を遣わせます。それほど親しくもない間柄では、相手ウ^ウのプライバシーに関することをすけすけ尋ねたり、聞かれもしない自分側エ^エのことをべらべらしゃべったりするのも、たしなみがないとされてきました。

これらは日本語の社会での伝統的な約束事であり、国が違い時代が違えばそれぞれ変わります。贈り物をする際に「つまらない物ですが」と言うと、そんな物を贈るのは③かえって失礼だと思い、食事をふるまうときに「何もありませんが」と言うと、ない物は食えないと理屈をこねる日本人がそのうち出て来ないとも限りません。しかし、それは、立派な相手にふさわしいだけの高級品や贅沢^{ぜいたく}な料理が用意できない自分の行き届かなさを詫^わびる前置きであり、謙虚さを示してきたのです。このような礼儀に関する待遇行為全般がコミュニケーションを支えているのであり、ことばはその重要な一部を分担するにすぎません。

（中村明『日本語のニュアンス練習帳』より）

（二）——線部①「敬語表現」とありますが、——線部が誤った敬語の使い方になっているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア こちらが展示品です。先生もどうぞ拝見してください。

イ 私の父が、ぜひとも先生にお礼がしたいと申していました。

ウ もうすぐ最初のお客様がお越しになる時間です。

エ ただいまお客様がお着物をお召しになっているところです。

（二）——線部ア、ウ、エ「の」の中から、他の三つと働きが違うものを一つ選び、記号で答えなさい。

（三）——線部②「早口でまくしたてれば、どんなに敬語を多用しても丁寧には響きません」とありますが、この中から、動詞をそのままでの形ですべて抜き出しなさい。

（四）——線部③「かえって」と、——線部が同じ品詞になっているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 柳の木が風に吹かれてたおやかになびく。

イ 難解な曲をミスせずに弾ききるとは、大した技量の持ち主だ。

ウ 彼は小説家であり、また、画家でもある。

エ もう少し早く起きていれば学校に遅刻せずに済んだ。

（五）——線部「本来ならば直接お目にかかってご挨拶申し上げます」という言葉には、どのような効果が見られますか。それを説明した次の文の□に入る最も適切なことばを本文中から十八字で探し、その最初の五字を抜き出しなさい。

話し相手に対して□を示すという効果。